

隋代の和蕃公主と北方・西方に対する隋の外交戦略

菅沼 愛語

はじめに

隋は、約三百年の分裂時代に終止符を打ち、中華の再統一という歴史的偉業を果たしたが、そのみならず、軍事と外交により四囲に勢力を伸ばし、最盛期には突厥や吐谷渾も含め東部ユーラシアの多くの民族を勢力圏内に従えた。その際、北方と西方に対する隋の外交において、有効な手段として和蕃公主が活用されている。

和蕃公主と言えば、王昭君が匈奴に嫁いだ前漢時代や最多の公主が降嫁した唐代の事例がよく知られる。前漢や唐ほどの知名度はないが、三十七年間の短命王朝であった隋（五八一～六一八年）でも何人もの和蕃公主が降嫁し、外交の一端を担っていた。具体的には、文帝時代に四名（文帝の養女となった北周の千金公主（改封されて大義公主）^①を含む）、煬帝時代に二名の計六名の和蕃公主が、突厥、西突厥、吐谷渾、高昌に各々降嫁している。

本稿では隋代の六名の和蕃公主すべてを取り上げ、隋が北方及び西方に対する対外戦略として公主による婚姻政策をどのように活用したかについて、諸史料から事実関係を抽出・整理するとともに、大きく変化する隋の国内外

の情勢に照らしながら、その歴史的意義について考察する。特に、公主降嫁が和親政策のみならず離間政策として用いられた点にも注目する。隋代の和蕃公主は、突厥に降嫁した大義公主（北周の千金公主）、安義公主、義成公主、西突厥に嫁した信義公主、吐谷渾に嫁いだ光化公主、高昌に嫁した華容公主の六名である。このうち出自や動向が分かるのは、大義公主、義成公主、華容公主の三名だけであり、安義公主、光化公主、信義公主は、降嫁先と降嫁年代のみが判明している。

隋は短命であつたがゆえに、王朝創設期、領土拡張期、衰退期（三度の高句麗遠征失敗）、滅亡という、時代を画するエッセンスを短期間に概観でき、各々の時期における公主降嫁の意義や外交的背景の特徴を見る事もできる。また、千金公主、義成公主、華容公主は、王朝交代後も生きのび、新王朝に対し、抗戦もしくは帰順した。それゆえ、和蕃公主が故国滅亡後、新王朝の対外政策にどのように関わったかを見る事も可能である。

まず、隋の和蕃公主に関する先行研究を簡単に紹介しておく。大義公主（千金公主）については、布目潮風氏が護雅夫氏、平田陽一郎氏らにより研究がなされている。布目氏は大義公主を取り上げ、隋と突厥がどのような関係にあつたのかを、北朝（北魏・西魏・東魏・北周）と柔然及び突厥との婚姻関係とも対比させながら考察している。護氏は、公主を通じて隋と突厥が舅婿関係を結んだ事を論じている。平田氏は、千金公主の突厥への降嫁政策と楊堅による周隋革命との関連性について論考している。義成公主については石見清裕氏が取り上げ、隋滅亡後、公主が煬帝の孫・楊政道を突厥に迎え入れ、隋室の存続と立て直しを図った事を論じている。關尾史郎氏は、煬帝の中央アジア支配という観点から華容公主と信義公主の降嫁時の状況の類似性に着目し、両者を比較検討している。崔明德氏は、先秦から清代までの中華王朝の周辺国及び少数民族への和親政策を整理しており、その中で隋の和蕃公主についても触れている。また、藤野月子氏は隋唐時代の和蕃公主を総括し、公主は皇帝からの恩寵として近隣諸国

に恵み与えられたと考察し、隋代の例として、突厥の啓民可汗に嫁いだ安義公主、高昌の麴伯雅に嫁いだ華容公主を挙げている^③。

本稿では、これら優れた先行研究の成果も踏まえつつ、隋代の和蕃公主六名すべてを取り上げる。そして、『隋書』『資治通鑑』『魏書』『周書』『北史』『旧唐書』『新唐書』『唐会要』『冊府元龜』『元和郡県図志』等の諸史料に基づき、隋の和蕃公主の全体像をまとめた上で、更に、隋が北方及び西方への勢力圏の拡大という戦略的観点から巧みに公主降嫁を活用した事を具体的な事例を示しつつ論考する。まず第一章で、突厥（東突厥及び西突厥）に降嫁した隋の和蕃公主（大義公主、安義公主、義成公主、信義公主）を取り上げ、公主降嫁の目的が両国の和親のみならず、離間政策としての側面も有していた事を浮き彫りにし、時期的にも、南北朝分裂期と中華統一以降とで公主降嫁の狙いが変化している事などを論じる。第二章では、東西交易路を扼する要衝となる吐谷渾と高昌への隋の外交戦略を、公主（光化公主、華容公主）の降嫁と関連させながら考察する。隋の国内外の情勢の推移と公主の降嫁状況の関連性については「年表」（概念図）、隋の和蕃公主の降嫁状況については「系図」、隋の六名の和蕃公主については「表1」、婚姻を用いた突厥への離間策については「表2」、王朝交代を経験した大義公主（北周→隋）及び、義成公主と華容公主（隋→唐）については「表3」に各々まとめたので、随時参照されたい。なお、これらの図・表・年表は、隋の和蕃公主を研究する際の有用な基礎資料となると期待する。また、本文に引用した史料の〔〕内は筆者の補足である。

〔年表〕 隋の和蕃公主

時期	西暦	年号	隋での出来事、及び隋を取り巻く国際情勢	和蕃公主・通婚政策に関する事柄
北周	580	大象2	北周の宣帝が崩御。楊堅が幼少の静帝を輔佐	千金公主が突厥の東面可汗・摂図に嫁ぐ
隋建国	581	開皇元	2月、楊堅が静帝の禅譲を受け、隋を建国。 この年、佗鉢可汗が死去。摂図が即位し沙鉢略可汗となる	
隋中華統一前	582	開皇2	沙鉢略可汗が40万騎を率い大規模に入寇	千金公主が隋への復讐のため突厥軍の入寇を扇動
	583	開皇3	隋の難題策により突厥が東西に分裂	
	584	開皇4	文帝と沙鉢略可汗が和親（文帝と沙鉢略可汗が舅姪関係を作る）	文帝が千金公主を大義公主に改封し養女となす
	585	開皇5	沙鉢略可汗が文帝に上表し「臣」と称す	
隋中華統一後	589	開皇9	隋が陳を攻め滅ぼす【隋による中華の再統一】	陳の滅亡後、文帝と大義公主との関係が悪化
	591	開皇11	吐谷渾の世伏が遣使し、藩屏と称して方物を献上。後宮に娘を献上したいと請願したが、文帝はこれを許さず	
	593	開皇13		大義公主が都藍可汗に殺される（実子育の誤解による）
	596	開皇16		光化公主が吐谷渾の世伏に降嫁
	597	開皇17	文帝が染干に安義公主を降嫁させ優遇したため、都藍可汗は怒り、朝貢を停止し、頻繁に入寇	安義公主が突厥の染干に降嫁（文帝が公主降嫁の際に染干を優遇したため、都藍可汗が怒る）
	598	開皇18	吐谷渾で内乱が勃発。世伏が殺害され伏允即位	光化公主が吐谷渾の新王伏允と再婚
			高句麗征伐	
	599	開皇19	4月、染干が入朝（都藍可汗が遼東可汗と連合して染干を攻撃したため、染干は敗走し隋に入朝）。10月、文帝が染干を啓民可汗に冊立。12月、都藍可汗が部下に殺される	10月、義成公主が突厥の啓民可汗に降嫁
	603	仁寿3	隋の策謀により遼東可汗の配下にいた鉄勒等の諸族が叛き、啓民可汗に叛乱。遼東可汗は大敗し吐谷渾に亡命。この後、啓民可汗が余衆を収め東突厥の大可汗となる	
	607	大業3	煬帝の北巡（煬帝が啓民可汗を訪問）	義成公主が蕭皇后（煬帝妃）に拝謁
	608	大業4	吐谷渾遠征	
	609	大業5	6月、煬帝が張陁夜ご滞在。高昌王麴伯雅が煬帝に拝謁。6月、吐谷渾の牧地を西海・河源・鄯善・且末等の郡県を設置	啓民可汗が死去。息子の始畢可汗が即位し、煬帝に許可を得た上で、義成公主と再婚
	610	大業6	この頃、西突厥で内訌勃発。射匱可汗が泥師処羅可汗を攻撃し、敗北した泥師処羅可汗は東に逃走	射匱可汗が煬帝に通婚を請願。煬帝が泥師処羅可汗の殺害を通婚の条件に提示したので、射匱可汗が泥師処羅可汗を攻撃
	611	大業7	12月、泥師処羅可汗が臨朔宮（河北省）で煬帝に拝謁	
隋衰退期	612	大業8	正月、第1次高句麗遠征。泥師処羅可汗と麴伯雅が遠征に従軍。9月、煬帝が東都洛陽に帰還	11月、華容公主が高昌王の麴伯雅に降嫁
	613	大業9	3月、第2次高句麗遠征。6月、楊玄感の乱が勃発	
	614	大業10	2月、第3次高句麗遠征	正月、信義公主が西突厥の泥師処羅可汗に降嫁
	615	大業11	煬帝の北巡。8月、始畢可汗が数十万騎を率いて入寇し、煬帝を雁門（山西省）で包囲	義成公主が始畢可汗に進言し、雁門を包囲中の突厥軍を撤退させ、煬帝を救出
隋滅亡後・唐代	617	大業13	5月、李淵が太原で挙兵し、11月、恭帝を擁立	
	618	武徳元	3月、煬帝が宇文化及に殺される。5月、李淵が唐を建国【隋の滅亡、唐の建国】	
	619	武徳2	2月、竇建徳が宇文化及を処刑し、蕭皇后を保護。4月、義成公主が蕭皇后と楊政道（煬帝の孫）を突厥に迎え入れる。竇建徳が宇文化及の首級を義成公主に献上。5月、隋の恭帝が崩御	始畢可汗が死去。義成公主は処羅可汗と再婚 泥師処羅可汗（信義公主の夫）が東突厥の使者に殺される 麴伯雅が死去。華容公主は麴文泰（伯雅と張太妃の子）と再婚
	620	武徳3	2月、処羅可汗が楊政道を隋王に擁立し、定襄（朔州）に隋の亡命政権を樹立	処羅可汗が急死。義成公主は可汗の弟咄叱（頡利可汗）を擁立し、頡利可汗と再婚
	630	貞観4	3月、唐が東突厥を討伐 12月、高昌王の麴文泰が入朝	東突厥の滅亡時、義成公主も唐軍に殺害される 太宗が華容公主に李姓を授け、常樂公主に改封

第一章 突厥に降嫁した隋の和蕃公主と隋の突厥政策

突厥が興隆した五五〇年代～五七〇年代、中華は分裂期の南北朝時代であり、華北では北周と北斉が激しい対立抗争を繰り返した。北周も北斉も、相手を凌ぐため、突厥の支援を渴望し、五六五年（保定五、天統五）頃には両国とも、突厥の三代目の大可汗・木杆可汗に通婚を請願し、可汗の歓心を得るため競って莫大な贈物をした。このため、四代目の大可汗・佗鉢可汗は、「南に二人の孝行息子（北周と北斉）がいれば、突厥に物不足の心配はない」と豪語した。^④そして、突厥はこうした中華の分裂に乗じて勢力を拡張し、モンゴリアから中央アジアに至る広大な領土を支配した。

文帝が隋を建国した当初（五八一年）、華北を統一したものの南方には陳があり、中華は依然として分裂したままであった。このため隋は二正面作戦を回避するため、強大な突厥に対し、和親策と離間策の両様で対応した。本章では、隋の外交を、中華統一の前後、衰退期等の時間的推移や隋の国内外の情勢にそって見ていく。そして、各々の時期で公主がどのように使われたのか、また公主がどのように行動したのか、等について見ていく。

第一節 突厥の国情について——可汗の分立、レヴィレート婚、可賀敦の権力——

突厥などの遊牧国家における、王位継承、国家構造、婚姻習俗は、中華とは異なる特徴を有していた。ここでは、

突厥の国情や婚姻習俗の中で和蕃公主と関わりのある事柄をまとめておく。①突厥には君主に相当する大可汗の他に複数の小可汗が各地に分立し、所領や兵力を有した。^⑤また、大可汗の位は概して父子相続ではなく、兄弟が継承するか、一族の集会によって次期可汗が選出された。このため、しばしば可汗位を巡る内紛が起こる事もあった。そこで、隋は小可汗に公主を降嫁させて懐柔し、突厥の内訌を煽るという外交戦略も実施した。②突厥にはレヴィ・レート婚の風習があった。レヴィ・レート婚というのは、夫の死後、寡婦が継子や義弟と再婚する婚姻習俗である。突厥では、可汗は父や兄が死去すると、継母や兄嫁と再婚した。^⑥大義公主と義成公主はこのレヴィ・レート婚の風習に則り、夫の死後、継子や義弟と再婚した。なお、レヴィ・レート婚の習俗は吐谷渾にもあり、光化公主も夫の死後、義弟と再婚している。^⑦③突厥では、可汗の妻を可賀敦と称した。可賀敦の権力については、『資治通鑑』卷一八二、大業十一年条に「突厥之俗、可賀敦預知軍謀。〔突厥の風習では可賀敦が軍の計略に参与した〕、『貞觀政要』卷九、議征伐篇に「北狄風俗、多由内政。〔北方民族の風習では妻により物事が決定される事が多い〕」とあり、可賀敦が政治面・軍事面で強い発言権を有した。以上のような突厥の国情・風習にも留意しつつ、公主らの動向を見ていきたいと思います。

第二節 中華統一前、北周の千金公主（大義公主）を用いた突厥への和親政策

千金公主は、北周の趙王招（武帝の弟）の娘であり、大象二年（五八〇）、突厥の東面可汗であった摂図（後の沙鉢略可汗）に降嫁した（系図参照）。千金公主の突厥への降嫁と周隋革命との相関については、平田陽一郎氏の優れた研究がある。平田氏は、北周からの篡奪を計画していた楊堅が、公主降嫁により突厥を牽制した事などを論考した。^⑧つまり、楊

堅にとつて公主を用いた婚姻政策は建国時より重要な外交戦略であつたと言える。

(1) 千金公主による隋への復讐

千金公主が突厥に降嫁後、楊堅が北周王朝を篡奪し、公主の一族も肅清したため、公主は隋への復讐を志した。折しも突厥では四代目の大可汗・佗鉢可汗が死去し、公主の夫・摂図が大可汗に推戴されて沙鉢略可汗となつた。そこで公主は沙鉢略可汗に対し、隋への攻撃を促し、沙鉢略可汗は四十万の大軍を率いて入寇した。^⑨

(2) 隋による突厥離間策と突厥の分裂

沙鉢略可汗の大攻勢に対し、文帝は長城の修復や派兵によつて突厥軍の猛攻に対抗すると同時に、「遠交近攻」という外交戦略も用いて突厥側の内訌を助長した。遠交近攻策を文帝に提案したのは、奉車都尉の長孫晟であつた。長孫晟は、千金公主の降嫁時、副使として随行し、突厥の内情・地理に通曉した。長孫晟は帰国後、文帝に対し、突厥には沙鉢略可汗の他にも、阿波可汗（三代目大可汗の本杆可汗の子）、西面可汗の達頭可汗（室点蜜可汗の子）などが各々強兵を有し、互いに猜疑心を抱きながら分立している事、武力による突厥征伐は困難であるが、可汗達を離間させることは容易である事などを指摘した（系図参照）。^⑩つまり、長孫晟は公主降嫁の際、分権的な突厥の実情を知り、離間策を考案したと思われる。

文帝は長孫晟の献策を採用し、沙鉢略可汗と共に入寇していた阿波可汗、達頭可汗を順次懐柔し各々を撤退させ

た。これに対し、沙鉢略可汗が怒り、阿波可汗の領地を襲撃し母親を殺害したため、阿波可汗は、開皇三年（五八三）、達頭可汗のもとに亡命した。^⑪達頭可汗は沙鉢略可汗の暴挙に怒り、阿波可汗に軍を統率させ沙鉢略可汗を攻撃させた。沙鉢略可汗は、阿波可汗と親しい貪汗可汗や地勤察とも対立したため、突厥の内訌が激化し、可汗達の間で対戦が続いた^⑫（系図参照）。

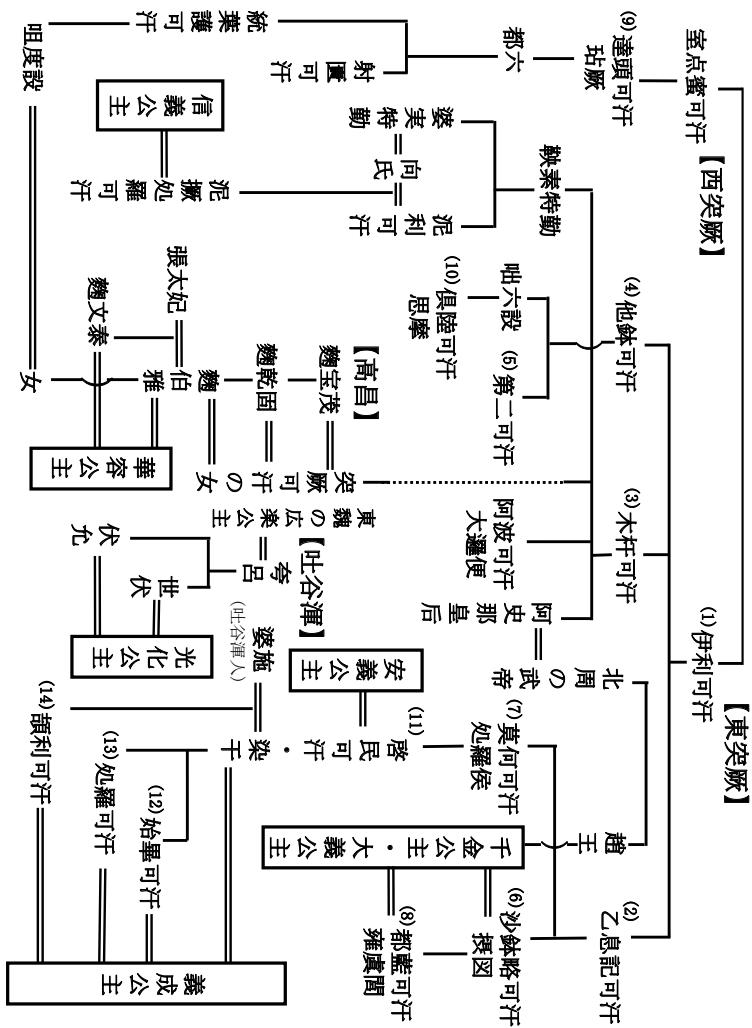
（3）千金公主の大義公主への改封と公主を利用した沙鉢略可汗との和親策

沙鉢略可汗は、内訌勃発により窮したため、文帝に遣使し、和親の締結と援軍の派遣を請願した。このとき阿波可汗や達頭可汗も文帝に対し、和睦と援軍派遣を求めたが、文帝はいずれに対しても拒絶した。しかし、開皇四年（五八四）、千金公主が上書し、文帝の養女になりたいと請願したため、文帝は千金公主に楊姓を賜り、改めて大義公主に封じ、沙鉢略可汗と和睦した。そして、文帝と沙鉢略可汗は文書を交換し、文帝が妻の父、可汗が女婿という形で擬制的家族関係（舅婿関係）を結んだ。^⑬また、沙鉢略可汗は開皇五年（五八五）、文帝に対し「臣」と称し、息子を来朝させた。^⑭

千金公主は当初、隋に報復するため沙鉢略可汗に入寇を促していたが、突厥に内訌が起こったため、隋との和解を図ったと思われる。文帝も、陳の討滅を見据え、後方の安全確保を重視し、北周出身の千金公主を養女となし、沙鉢略可汗と和睦したと考えられる。また、沙鉢略可汗も他の可汗に対抗するため、隋からの軍事的支援を必要とし、公主を隋との親善強化に利用したと考えられ、相互的な共生関係を築いたのである。

これ以降、沙鉢略可汗は朝貢を欠かさず、隋と親睦関係を維持した。開皇七年（五八七）、沙鉢略可汗が病死すると、

〔系図〕 隋の和蕃公主



※四角で囲んだ女性が隋の和蕃公主。

※大義公主、義成公主、光化公主、華容公主は、レザイシート婚の風習に則り、夫の死後、継子もしくは義弟と再婚した。

※ (1)(2)(3)…は突厥（東突厥）可汗の継承順位。

〔表 1〕隋の和蕃公主

国	名前・出自	嫁ぎ先	降嫁年	降嫁の契機・隋の戦略等	公主の活躍・公主に関する事柄	典拠
突厥・東突厥	大義公主 (北周の千金公主)： 趙王招(北周武帝の弟)の娘、開皇 4 年(584)文帝の養女となり大義公主に改封された	沙鉢略可汗(伊圖)	北周の大象 2 (580)	北周の宰相楊堅が、突厥を牽制するため(対外政策)、北周諸王の肅清のため(国内対策)、千金公主を東突厥可汗の契機に降嫁させた。〔平田陽一郎「周隋革命と突厥情勢」〕	①隋の建国後、公主は復讐のため、沙鉢略可汗に隋を攻撃させた。②隋の離間策により突厥が東西に分裂し(開皇 3=583)、沙鉢略可汗が弱したため、公主は文帝の養女になりたいと請願。文帝は千金公主を大義公主に封じ、養女となす(開皇 4=584)。③大義公主を通じ、文帝と沙鉢略可汗は舅甥関係となった。④隋は、妻の父を拜するよう諭すことで沙鉢略可汗を弱かせ、文帝の勅書を受け取らせた	隋 51 長孫晟伝、隋 67 裴矩伝、隋 84 突厥伝、通 175、通 176、通 178
		都藍可汗・沙鉢略の子	開皇 8 (588)頃	沙鉢略可汗の死後、公主は可汗の息子都藍可汗と再婚	陳の滅亡(589)後、公主が可汗的行動(西突厥の泥利可汗と連絡、楊欽と共に謀し隋の扶撃を画策)を起こしたため、文帝は公主を危険視し、謀略により都藍可汗に大義公主を殺害させた(開皇 13=593)	
	安義公主・宗室の娘	突利可汗・染干	開皇 17 (597)	隋は突厥離間策として公主を染干に降嫁させ、染干を優遇	文帝が安義公主の降嫁の際、染干を優遇したため都藍可汗が怒る。都藍可汗は、連瑱可汗と連合して染干を攻撃(なほ、安義公主は降嫁後、死す)	隋 84 突厥伝、通 178
	義成公主・楊善経の娘、楊善経の姉	啓民可汗・染干	開皇 19 (599)	安義公主の死後、義成公主が後妻として降嫁。隋は染干への懐柔策を継続	①開皇 19 年、文帝は染干を啓民可汗に冊立した時、後妻として義成公主を降嫁させた。②大業 3 年(607)義成公主は啓民可汗と共に行宮で煬帝及び蕭皇后に拝謁	
		始畢可汗・啓民の長男	大業 5 (609)	啓民可汗の死後、長男の始畢可汗と再婚。このとき始畢は隋帝に公主との再婚を請願し、煬帝はこれを許可	義成公主は大業 11 (615)北巡中の煬帝に使者を派遣し、始畢可汗が騎兵数十万を率い、煬帝を襲撃する計画である事を通報。その後、始畢可汗は雁門で煬帝を包囲した時、煬帝が公主に救いを求めた為、公主は可汗に「北巡に急あり」と告ぎ、可汗を撤退させた	隋 4 煬帝紀、隋 84 突厥伝、旧 54 竇建德伝、旧 67 李靖伝、旧 194 突厥伝、新 215 突厥伝、通 178、通 180、通 181、通 182、通 187、通 193
		処羅可汗・啓民の次男	武徳 2 (619)	始畢可汗の死後、可汗の次弟・処羅可汗と再婚	①煬帝の暗殺後、竇建德は隋殺者の宇文化及を殺し、首級を義成公主に献上した。②公主は蕭皇后と楊政道(煬帝孫)を突厥に迎え入れた。③処羅可汗の急死後、公主は処羅可汗の息子奥(都射)射を娶り、可汗の弟吐苾を擁立した	
		頡利可汗・啓民の三男	武徳 3 (620)	処羅可汗の急死後、公主が処羅可汗の弟・頡利可汗を推戴し再婚	貞観 4 (630)唐が突厥を討滅。その際、義成公主も唐軍によって殺害された	
西突厥	信義公主・宗室の娘	泥厥処羅可汗	大業 10 (614)正月	可汗を隋の傀儡となし西突厥を掌握するため(煬帝は可汗のため故地回復も計画したが実行できず)	降嫁後の信義公主の動向は不明	隋 4 煬帝紀、隋 84 西突厥伝
吐谷渾	光化公主・宗室の娘	世伏	開皇 16 (596)	吐谷渾との和親が目的。吐谷渾と突厥の連繫阻止も考えられる	開皇 11 (591)、世伏が甥の無素を入朝させ、藩屏と称し方物を献上し、娘を後宮に献じたいと請願。(文帝は娘の後宮入りを許さず)。これ以降、阿史那は使者を交換し交流を重ねる。開皇 16 (596)、文帝は世伏に光化公主を降嫁させ、隋と吐谷渾の通好が成立。(このとき世伏は公主を天后と称したいと請願するが、文帝はこれを許さず)	隋 83 吐谷渾伝、通 178
		伏允・世伏の弟	開皇 17 (597)	世伏が国人に殺されたので、世伏の弟伏允と再婚	伏允と再婚後の公主の動向は不明	
高昌	華容公主・宇文王波・宗室の娘(唐の太宗の養女となり、常樂公主に改封)	麹伯雅	大業 8 (612)11 月	東西交易路の要衝・高昌を掌握する為。また公主降嫁により高昌と突厥の間に楔を打ち込む為	華容公主は高昌では義婦夫人と呼ばれた〔錢伯泉「敦煌遺書 S.2838『維摩結經』の題記研究」(『敦煌研究』2007 年第 1 期)〕	隋 4 煬帝紀、隋 83 高昌伝、旧 198 高昌伝、新 221 高昌伝、通 181、会 96、元 40
		麹文泰・伯雅の息子	武徳 2 (619)頃	伯雅の死後、文泰(伯雅と張太妃の息子)と再婚	唐の太宗が公主に花かんざしを賜ったので、公主も太宗に玉盤を献上。貞観 4 (630)公主は太宗に対し、唐王室の親族になりたいと請願。太宗は華容公主に李姓を賜り、常樂公主に改封	

※〔 〕内は典拠となる先行研究。平田陽一郎「周隋革命と突厥情勢」=「周隋革命と突厥情勢—北周・千金公主の降嫁を中心に—」

(『唐代史研究』第 12 号、2009 年)、錢伯泉「敦煌遺書 S.2838『維摩結經』の題記研究」(『敦煌研究』2007 年第 1 期)。

※典拠史料の略号：隋=「隋書」、旧=「旧唐書」、新=「新唐書」、通=「資治通鑑」、会=「唐会要」、元=「元和郡縣圖志」。

※大義公主・義成公主・光化公主・華容公主は、レヴィエート婚の風習に則り、夫の死後、継子もしくは義弟と再婚した。

弟の処羅侯が七代目の大可汗となり、文帝から莫何可汗に冊立された。また、開皇八年（五八八）、莫何可汗が戦死すると、甥の雍虞閭（沙鉢略可汗の息子）が八代目の大可汗・都藍可汗となり、レヴィレート婚の習俗に従って大義公主と再婚し、隋と良好な関係を維持した（系図参照）^⑤。

第三節 中華統一後、北周の公主（大義公主）の排除

東突厥との和親により北方の脅威を緩和した隋は、中華内の問題に専念し、開皇九年（五八九）、陳を滅ぼし、約三百年ぶりに中華再統一の大業を成した。しかし、陳の滅亡を契機に大義公主と文帝の関係が悪化し、文帝は大義公主の排斥を画策するようになった。以下の出来事は、『隋書』卷八四、突厥伝、『資治通鑑』卷一七八、開皇十三年条によるものである。

陳滅亡後、文帝が陳の後主叔宝の屏風を大義公主に賜ったところ、公主が屏風に詩を書き陳の滅亡をうたった。このため文帝は公主を憎み、冷遇した。また、公主が西突厥の泥利可汗と連絡を取り合ったため、文帝は公主が異変を起こす事を警戒し、対策を練った。更に、彭公劉昶の使者と称する楊欽が、公主を訪れ、隋への反乱の計画を告げ、公主も呼応し北辺を襲撃するよう要請した。都藍可汗はこれを信じて隋への朝貢を停止し、大義公主も、側近の安遂迦と楊欽を謀議させ、都藍可汗を扇動した。このため、文帝は大義公主と安遂迦が私通している事を暴き、大義公主から公主の身分を剥奪した。^⑥

その後、文帝は公主の殺害も試みた。折しも、都藍可汗の従弟の染干（突利可汗）が、文帝に通婚を請願した。

染干は莫何可汗（七代目大可汗）の息子であったが、莫何可汗の死後、従兄の都藍可汗が大可汗となった。そこで染干は都藍可汗に対抗するため、文帝に通婚を請願したと思われる。

文帝は大義公主の謀殺に染干を利用しようと考え、染干に対し、「大義公主を殺せば通婚を許す」と返答した。このため、染干は都藍可汗に対して大義公主を讒言した。讒言を信じた都藍可汗は怒り、開皇十三年（五九三）、大義公主を殺害した。^⑭

文帝は、中華統一も果たしたため、敵愾心の強い前王朝の公主を排除し、隋の公主を突厥可汗の妻となして、突厥への挺入れを強化しようと考えたのであろう。

第四節 中華統一後の隋の外交（一）——安義公主と義成公主の降嫁——

南北朝の分裂時代、突厥が婚姻等を好餌とし北周と北斉を翻弄したが、隋が中華を再統一し、中央集権国家を樹立すると、逆に、隋が突厥を内から突き崩す手段として公主降嫁を利用するようになる（概念図、表2参照）。つまり、文帝は大義公主の謀殺に利用した染干を今度は突厥の離間に利用し、染干を都藍可汗に対抗させた。^⑮

（1）安義公主の染干への降嫁と突厥への離間策

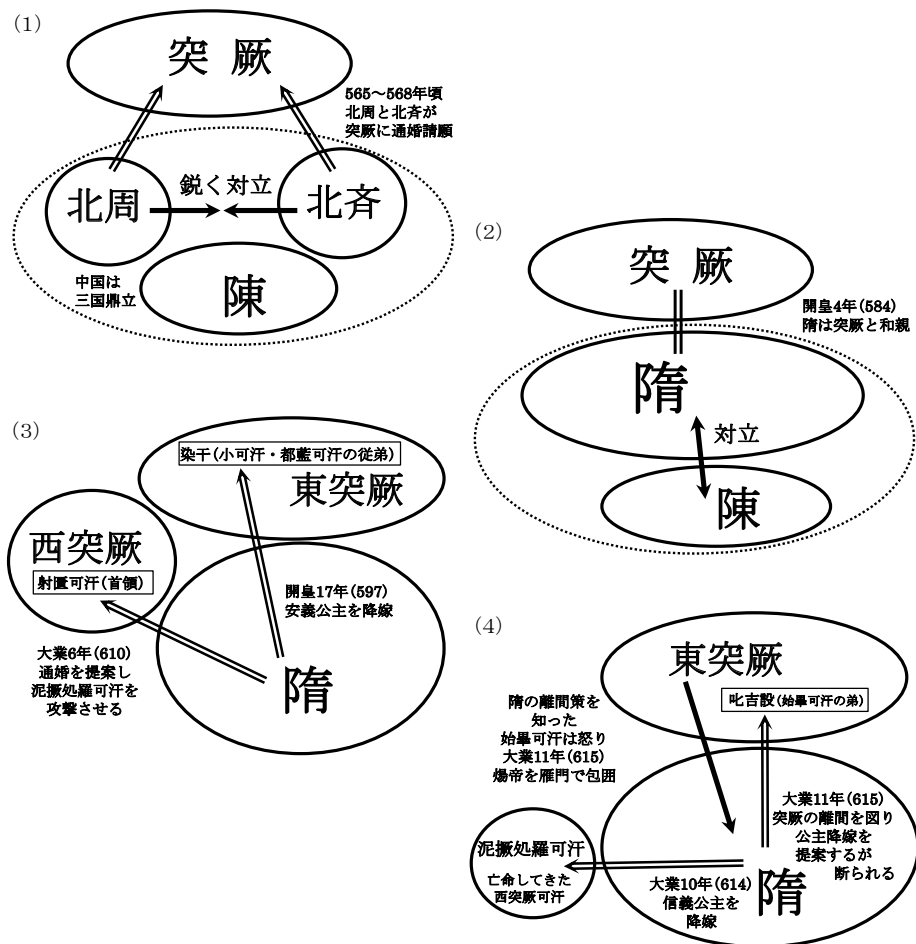
開皇十七年（五九七）、文帝は染干に対し、安義公主を嫁がせた。^⑯ 安義公主の出自については、『隋書』卷八四、

〔概念図〕 隋および北周・北斉による突厥への通婚政策の時間的推移

※白矢印・二重線は和親、黒矢印は敵対を表す

- (1) 南北朝時代：北周・北斉の対立と両国の突厥への通婚請願
- (2) 中華統一前：突厥に対する隋の和親策
- (3) 中華統一後：公主を利用した隋の突厥（東突厥・西突厥）への離間策
- (4) 隋の衰退期（高句麗遠征失敗後）：

突厥（東突厥・西突厥）に対する通婚政策（和親及び離間）



〔表 2〕 公主降嫁・通婚政策を用いた隋による突厥離間策

対象	年代	目的	公主降嫁や通婚を用いた隋の対突厥政策	離間策の成否	典拠
東突厥: 都藍可汗と 染干(啓民可汗)	開皇 13 (593)頃	反隋勢力 の排斥	大義公主(北周宗室の娘)が反隋的な行動を起こしたため、文帝は公主の殺害を決断。折しも染干が通婚を請願したので、文帝は「大義公主を殺害すれば通婚を許す」と返答。そこで染干は都藍可汗に対し大義公主を讒言した。染干の讒言を信じた都藍可汗は、開皇 13(593)、大義公主を殺害	成功: 敵愾心の強い北周の大義公主を排斥する事ができた	隋 51 長孫晟伝、 隋 84 突厥伝、 通 178
	開皇 17 (597)～ 仁寿 3 (603)	突厥内の 勢力の分 断	大義公主を殺害後、都藍可汗が文帝に通婚を請願したが、文帝は突厥の離間を画策し、弱小の染干に安義公主を降嫁させた(開皇 17=597)。都藍可汗は怒り、達頭可汗と連合して染干を攻撃したが、隋は染干を支援。都藍可汗は部下に弑殺され(開皇 19=599)、達頭可汗は吐谷渾に亡命した(仁寿 3=603)	成功: 反隋の都藍可汗と達頭可汗を排除し、親隋の染干を東突厥の大可汗となした。可汗は治世中、一度も入寇せず隋に忠義を尽くした	隋 51 長孫晟伝、 隋 84 突厥伝、 通 178、 通 179
西突厥: 泥厥処羅可汗と 射置可汗	大業 6 (610)頃～ 大業 7 (611)	西突厥の 対立勢力 の離間	西突厥では、大可汗の泥厥処羅可汗と首領の射置可汗が対立していた。煬帝は当初、泥厥処羅可汗との通好を図ったが、可汗は煬帝への拜謁を拒んだ。折しも射置可汗が煬帝に通婚を請願したため、煬帝は射置可汗を大可汗となし、「泥厥処羅可汗を殺害すれば通婚を許す」と返答。射置可汗は泥厥処羅可汗を襲撃した。泥厥処羅可汗は大敗し、大業 7(611)、煬帝のもとに亡命	成功: 煬帝は泥厥処羅可汗を受け入れると、曷薩那可汗の称号を与え、信義公主を降嫁させた	隋 84 西突厥伝、 通 181
東突厥: 始畢可汗と 叱吉設(始畢の弟)	大業 11 (615)	東突厥の 勢力の分 断	第 3 次高句麗遠征(大業 10=614)の失敗後、始畢可汗の勢力が盛んとなり、煬帝は脅威を覚えた。そこで煬帝は突厥の分裂を画策し、始畢可汗の弟叱吉設に対し公主の降嫁と南面可汗への冊立を提案した。しかし叱吉設が事柄の提案を拒絶したため、突厥離間策は失敗	失敗: 隋の離間政策を知った始畢可汗は怒り、隋に侵攻すると、雁門で煬帝を包囲	隋 67 裴矩伝、 通 182

※典拠の略号: 隋=『隋書』, 通=『資治通鑑』

突厥伝に「宗女」とのみ記される。

文帝は公主降嫁の際、突厥の離間を図り重臣の派遣や贈物の授与等により染干を優遇した。このため都藍可汗は怒り、隋の北辺を頻繁に襲撃した。^②文帝が反撃を試みると、都藍可汗は西方の達頭可汗と連合して染干を攻め、染干の兄弟や子供を殺害した。染干は数百騎を率い隋に亡命した。^③降嫁後の安義公主の動静は不明であるが、開皇十九年（五九九年）十月、安義公主が既に亡くなっていたため、文帝は染干と義成公主を再婚させた。^④これより安義公主は開皇十九年十月以前に死去したと推測される。安義公主の降嫁後、染干と都藍可汗の対立が激化した。取り巻く状況の過酷さが、公主の生命を縮めたと思われる。

（2）義成公主の啓民可汗（染干）への降嫁と、隋による東突厥の掌握

安義公主が死去したので、開皇十九年（五九九年）十月、文帝は改めて義成公主を染干に嫁がせた。^⑤義成公主の出自については、『新唐書』卷二二五、突厥伝に、楊諒の娘と記される。また同伝によれば、公主には楊善経という弟もいた。楊諒の出自は不明であるが、楊という姓から推測し、文帝の一族である可能性も考えられる。

文帝は、開皇十九年（五九九年）十月、染干を意利珍豆啓民可汗に冊立し、義成公主を嫁がせた。また、文帝は都藍可汗に対し大規模な討伐軍を組織したが、隋軍の出撃前の開皇十九年十二月、都藍可汗は部下に弑殺された。その後、達頭可汗が步迦可汗と称し、大可汗となり、隋軍と対戦した。しかし、長孫晟の策謀により、達頭可汗の配下にいた鉄勒等の諸族が叛き、啓民可汗に降伏したため、仁寿三年（六〇三年）、達頭可汗は大敗し、吐谷渾に亡命した。これにより啓民可汗は余衆を支配下に収め、東突厥の大可汗となった。啓民可汗は亡くなるまで一度も隋に入寇せ

ず、隋にとって忠実な傀儡となった。

以上のように、隋は、弱小勢力の染干に公主を降嫁させて優遇する事で突厥を離間させ、反隋的な都藍可汗と達頭可汗を排斥し、親隋の啓民可汗（染干）を突厥の大可汗として推戴し、突厥を臣従させた。また、公主に関して言えば、隋は突厥の内訌を促進すると同時に、北周の公主（大義公主）を殺して隋の公主を可賀敦に代えるという一石二鳥の政策を実行した。可賀敦を隋の宗室の娘にした事により、隋はより確実に突厥を掌握する事もできるようになった。

（3）公主降嫁による突厥と吐谷渾の連繫阻止

啓民可汗は、吐谷渾人の女性を妻とし、息子（莫賀咄設、後の頡利可汗）もなしていたが、義成公主が降嫁すると隋の威光を恐れ、吐谷渾との通好を絶った。^⑤ 突厥と吐谷渾は、開皇二年（五八三）、連合して涼州を襲撃した事もあり、隋にとって突厥と吐谷渾の通好は脅威であった。しかし、義成公主の突厥への降嫁は、突厥と吐谷渾の間に楔を打ち込んだ。つまり、公主降嫁は、周辺諸国の間の連繫を阻止する重要な役割も果たし、付加的な効果もあったと言えよう。

（4）通婚を用いた隋の西突厥に対する離間政策

隋は、西突厥に対しても通婚を用いた離間策を実行した。大業六年（六一〇）頃、西突厥では、大可汗の泥師処

羅可汗^㉗（木杆可汗の曾孫）と首領の射置可汗（達頭可汗の孫）が対立していた。煬帝は当初、泥獺廝羅可汗との通好を図ったが、可汗は煬帝への拝謁を拒んだ。折しも射置可汗が煬帝に通婚を請願したため、煬帝は射置可汗を大可汗となし、「泥獺廝羅可汗を殺害すれば通婚を許す」と返答した。このため射置可汗は泥獺廝羅可汗を襲撃した。泥獺廝羅可汗は大敗し、大業七年（六一二）、煬帝のもとに亡命した^㉘（系図、表2参照）。このように隋は西突厥に対して巧みに通婚を持ちかけて内紛を煽り、勢力を削ぐ事に成功している。

第五節 中華統一後の隋の外交（二）——衰退期の外交と公主の活動——

煬帝は、大業八年（六一二）～大業十年（六一四）、三度の高句麗遠征を行ったが、いずれも失敗し、内乱（楊玄感の乱など）も勃発した。そこで、煬帝は東突厥と西突厥に対し、和親策もしくは離間策で臨み、頽勢の挽回を図った。ここでは、衰退期の隋の外交、公主の活動について取り上げ、考察を加える。

（一）突厥軍による雁門包囲と義成公主の活躍

大業五年（六〇九）、啓民可汗が死去し、長男の始畢可汗が即位した。始畢可汗は、煬帝に許可を得た上で義成公主と再婚した^㉙。

しかし煬帝は三度の高句麗遠征に失敗後、突厥の強盛を恐れ、以下に挙げる二つの策謀によって突厥の弱体化を

図った。①隋は、始畢可汗の弟叱吉設に対し、公主の降嫁と南面可汗への冊立を提案した。だが、叱吉設は隋の申し出を断り、始畢可汗もこれを知り、隋を怨むようになった(表2参照)。これにより突厥への離間策は失敗した。②隋はまた、始畢可汗が信任する謀臣のソグド人、史蜀胡悉を馬邑(山西省)に誘き出し殺害した。^⑧

この二つの策謀が、始畢可汗を怒らせる事となった。大業十一年(六二五)八月、煬帝が北巡を行うと、始畢可汗は煬帝の襲撃を計画した。このとき義成公主が煬帝に使者を派遣し、突厥軍による襲撃計画を報告したため、煬帝は急遽、雁門(山西省代県)に逃げ込んだが、始畢可汗は数十万の軍勢で雁門を包囲した。煬帝は窮地に陥ったが、内史侍郎の蕭瑀が、突厥では可賀敦が軍事を掌るため、義成公主に救いを求めるよう進言した。煬帝が公主に救いを乞うたところ、公主は始畢可汗に遣使し、北方で緊急事態が発生したと告げ、撤退を促した。このため、同年九月、始畢可汗は雁門の包囲を解いて撤兵した。^⑨

以上から、義成公主が可賀敦として政治・軍事に明るく、使者を派遣するなど一定の権力を有していた事がわかる。また、突厥に異変が起こった場合、隋に報告する事が公主に期待された役割であったと推測される。

なお、隋による突厥への離間策が失敗した背景には、高句麗遠征の失敗も影響していると思われる。叱吉設が公主降嫁や冊立に魅力を感じなかったのも、始畢可汗が数十万の軍勢を率いて煬帝を襲撃できたのも、高句麗遠征の失敗後、隋の権威が失墜し、北辺防備が弛緩していた事を示すものと筆者は考える。

(2) 西突厥の亡命可汗・泥撅処羅可汗への信義公主の降嫁

煬帝は、大業十年(六二四)正月、西突厥の泥撅処羅可汗に宗女の信義公主を降嫁させた。^⑩泥撅処羅可汗は、先

述の如く西突厥で勃発した内紛で敗北し、大業七年（六一二）、隋に亡命してきた人物である。煬帝は泥獺処羅可汗の帰順を喜び、大業八年（六一三）正月、可汗に曷婆那可汗の称号を授け、第一次高句麗遠征にも伴った³⁴。

煬帝は、泥獺処羅可汗に信義公主を嫁がせ、可汗のために故地も回復する心づもりであつたが、信義公主が降嫁した翌月の大業十年（六一四）二月より第三次高句麗遠征を行つており、故地回復のために西突厥遠征を行う余裕はなかつた³⁵。泥獺処羅可汗への優遇策は、隋が東突厥の啓民可汗に対して行つた融和政策（可汗への冊立、公主の降嫁、隋軍による故地回復）と酷似する。煬帝は泥獺処羅可汗を啓民可汗と同様に支援し、可汗号の授与や公主降嫁によつて権威付けを行い、隋の軍事力で故地を回復後、泥獺処羅可汗を傀儡となし西突厥を掌握する計画であつたと推察する。

第六節 隋滅亡後、義成公主の動向——公主による隋王朝再興の試み——

煬帝が暗殺され、李淵が禅譲を受けて唐王朝を創始した事により、隋は滅亡した。しかし、突厥に嫁いだ義成公主は生きのび、隋の滅亡後、突厥の軍事力も利用しながら隋王朝の再興を試みた。隋の滅亡（六一八年）から突厥滅亡（六三〇年）に至るまでの義成公主については、石見清裕氏の優れた研究がある。石見氏は『旧唐書』巻五四、竇建德伝、『北史』巻十四、蕭皇后伝などを手がかりとし、義成公主が、煬帝の孫・楊政道を突厥に迎え入れ、隋朝復興に尽力した事などを考察した³⁶。ここでは石見氏の研究に基づき、隋滅亡後の義成公主の動向を簡単にまとめておく。

〔表 3〕 王朝交代を経験した大義公主（北周→隋）、及び、義成公主・華容公主（隋→唐）とそ

の周囲の動向：公主、隋及び唐、突厥及び高昌の対応

公主名：降嫁先	公主の新王朝への対応	新王朝(隋、唐)の公主への対応	中華王朝交代時における 降嫁先(突厥、高昌)の対応・ 公主の利用
大義公主(北周の 千金公主)：突厥	突厥を扇動し北周(故国)のため隋に報復：北周が平叛ご滅ぼされたため(581)、公主は夫の沙鉢略可汗を唆し、隋を攻撃させた	隋は突厥軍を扇動する公主によって苦闘を強いられる：公主が沙鉢略可汗を扇動し、隋を攻撃させたため、隋は突厥の大規模な入寇に苦戦	突厥は公主を口実に隋を攻撃：突厥の沙鉢略可汗は、妻が北周の公主だったため、北周のために報復するとの名目で隋を攻撃
	文帝の養女となる事で隋と和解：隋の遠交近攻政策により突厥の内訌が激化すると、開皇 4(584)、公主は文帝の養女となり、文帝と和解	隋は公主を養女となし突厥と和親：文帝は開皇 4(584) 千金公主ご楊姓と大義公主の称号を与えて養女となし、沙鉢略可汗と和睦	突厥は公主を通じて隋文帝と舅婦関係を結び和親：大義公主が文帝の養女になった事で、沙鉢略可汗は文帝と舅婦という擬似的な家族関係を結び、和親した
	隋による陳郡滅亡後、公主は反隋行動を起こす：陳の滅亡(589)後、公主は反隋的な行動(西突厥の泥利可汗との連絡や、楊欽と共謀して隋の杖撃を画策)を行った	中華統一後、隋は公主の殺害を画策：文帝は公主の反隋行動を知り、公主の排斥・殺害を慫慂。中華統一を完遂した文帝は、本格的に突厥の攻略に着手したと考えられる	隋の謀略により突厥は公主を殺害：都藍可汗は、隋と通謀した染干の讒言を信じ、開皇 13(593)、大義公主を殺害
義成公主：突厥	隋(故国)の再興を画策：隋が滅亡したため(618)、公主は煬帝の孫楊政道を突厥に迎え入れ、隋王朝の再興を図った	唐は公主を殺害：貞観 4(630) 唐軍は突厥を討滅した際、義成公主を殺害	突厥は隋を支援し唐に對抗：突厥は、隋の亡命政権を支援。(隋の公主の夫である事も、可汗にとっては隋滅亡後の中華への侵攻の口実になったかも知れない)
華容公主(唐の常楽公主)：高昌	高昌(降嫁先)の存続のため唐に恭順：太宗が公主ご花かんどしを賜ったので、公主も返礼として太宗に玉盤を献上。貞観 4(630) 公主は太宗に対し唐王室の親娘になりたいと請願し、太宗から李姓と常楽公主の称号を賜る。公主は唐の養女となる事で唐と高昌の親善を深め、高昌の存続に尽力したと思われる	唐は公主を養女となし高昌と和親：太宗は公主ご花かんどしを賜る。貞観 4(630) 太宗は華容公主に李姓を賜り、常楽公主に改姓。唐は、公主を養女にする事で高昌との親善強化を試みたと考えられる	高昌は唐に臣従の意を示すため公主を利用：高昌王の麴文泰は、貞観 4(630) 来朝し、太宗に恭順の意を示し高昌の存続を図った。文泰は妻の華容公主を太宗の養女となす事で、唐との親善強化を試みたと思われる

突厥の処羅可汗と頡利可汗は、煬帝の孫の楊政道を隋王として擁立し、唐と交戦した。義成公主はレヴィレート婚の風習に則り、処羅可汗、頡利可汗と各々再婚した。武徳三年（六二〇）、処羅可汗が急死した際、義成公主は可汗の息子奥射設を退け、可汗の弟咄苾を頡利可汗として擁立した。^⑦これが突厥側の不和を助長し、唐に乗じられる要因となった。唐は、不満を抱く奥射設や突利可汗（頡利可汗の甥）を懐柔し、突厥に服属する鉄勒諸部も帰服させ、貞観四年（六三〇）、東突厥を討滅した。その際、義成公主も唐軍により殺害されている。^⑧

第七節 まとめ

以上のように、隋は国内外の情勢に感じつつ和親策と離間策を巧みに使い分け、突厥に対応した。また、大義公主と義成公主は時には可賀敦としての権力を行使し、突厥の政治・軍事を左右した。夫の死後もレヴィレート婚によつて次期可汗の妻となり、可賀敦としての権力を維持できる点も公主の権力拡大につながり、義成公主のように四代の可汗の妻となった場合、可汗を擁立できるほどの権力行使も可能になったと思われる。

第二章 吐谷渾・高昌に降嫁した和蕃公主と隋の西方への外交戦略

隋は西方に勢力圏を拡張する際、吐谷渾と高昌に公主を降嫁させ、懐柔を試みた。吐谷渾も高昌も東西交易路

を扼する要衝であり、突厥を牽制するためにも、この二国の掌握は重要であつた。本章では、吐谷渾と高昌に対する隋の外交を公主降嫁も関連させ論じる。

第一節 吐谷渾への公主降嫁―光化公主―

吐谷渾は青海を根拠地となし、東西交易路の要地に位置した。分裂期の南北朝時代には、南朝が北魏（三八六～五三四年）を包囲するため吐谷渾との連繫を図り、東魏（五三四～五五〇年）は吐谷渾と二重に通婚し、連繫して西魏を挟撃するなど、吐谷渾は外交上、国際情勢上、重要な役割を担つた。^{④⑤}

隋の建国当初、吐谷渾は西北辺（涼州、弘州、廓州、臨逃）を襲撃し、軍事的圧迫を加えた。^{④⑥}涼州襲撃の際には、吐谷渾は突厥とも連繫し、隋に少なからず脅威を与えた。しかし、隋が陳を滅ぼす（開皇九〇五八九）と、吐谷渾の王・夸呂^{④⑦}は隋を恐れ險要の地に逃走し、開皇十一年（五九二）死去した。^{④⑧}

その後、夸呂の息子世伏^{④⑨}が即位した。世伏は開皇十一年（五九二）、甥の無素を入朝させ、藩屏と称して方物を献上し、娘を後宮に献じたいと請願した。^{⑤⑩}これに対し、文帝は娘の後宮への献上を断つた。吐谷渾の娘を後宮に入れた場合、他の近隣国も隋におもねるために娘を献上するであろうから、というのが、文帝が断つた理由であつた。^{⑤⑪}しかし、この遣使を契機として、その後も隋と吐谷渾の間で使者が交換され、交流が重ねられた。^{⑤⑫}そして開皇十六年（五九六）、文帝は光化公主を世伏に降嫁させた。^{⑤⑬}光化公主の出自は、「宗女」とのみ記される。^{⑤⑭}

これにより、隋と吐谷渾の通婚が成立した。文帝は、和親策として世伏に公主を降嫁させた。この頃の隋の突厥

政策を見ると、文帝は開皇十七年（五九七）、染干に安義公主を嫁がせ都藍可汗との離間を画策し、突厥攻略を開始している（第二章、年表参照）。吐谷渾と突厥は、隋初に連合して入寇した事もあるため、隋にとって両国の連繋は危険であった。そこで文帝は、吐谷渾と突厥の連繋阻止も考慮し、前年の開皇十六年（五九六）に公主を世伏に降嫁させ、親善の強化を図ったと考えられる。

なお、光化公主が降嫁した翌年の開皇十七年（五九七）、吐谷渾に大乱が起こり、国人が世伏を殺害し、世伏の弟の伏允を推戴した^④。吐谷渾にもレヴィレート婚の風習があったため、新可汗の伏允は、文帝に遣使し公主との再婚を請願し、文帝の許可を得た上で光化公主と再婚した^⑤。文帝は、伏允とも親善関係を維持したいと考え、公主の再婚を許可したのであろう。

光化公主の降嫁も有効に作用し、文帝期の両国の関係は良好であったが、煬帝の代になると関係は一変した。伏允は息子の順（生母は不明）を来朝させ、煬帝に恭順の意を示したが、煬帝は積極的な対外拡張を志し、大業四年（六〇八）〜大業五年（六〇九）、吐谷渾遠征を行った。このとき伏允が党項に亡命したため、煬帝は吐谷渾の故地に西海、河源、鄯善等の郡県を置き、隋の管轄下に組み込んだ^⑥。煬帝は、郡県設置により、東西交易路と西方諸国の朝貢路の掌握を試みたと思われる。しかし、隋末の混乱期（六一七年頃）、伏允が帰国し、吐谷渾を再び支配した^⑦。なお、伏允と再婚後の光化公主の動向や生死については史書に見えず不明である。

第二節 高昌への公主降嫁——華容公主（唐の常樂公主）——

高昌は東西交易路の要衝にあり、唐代には玄奘が訪問した事でも知られる。高昌は軍事的にも経済的にも中央アジア支配のための重要拠点であったため、突厥からの強い支配を受けていた。煬帝は、西方への勢力圏の拡張により、高昌の掌握も試み、その際、高昌王の麴伯雅に華容公主を嫁がせた。

（一）突厥による婚姻も用いた高昌への支配

高昌の支配を重要視した突厥は、婚姻を通じて高昌王の麴氏と固く結びついた。麴伯雅の祖父宝茂は、突厥可汗の娘を娶り、突厥から頡利菟（首長）に任命された。突厥可汗の娘は、宝茂の死後、宝茂の息子の乾固と再婚し、乾固の死後には、更に孫の伯雅と再婚した。義理の息子、及び孫との再婚は、突厥の婚姻習俗であるレヴィレート婚の風習に従ったものである。伯雅は当初、祖母との再婚を拒否したが、突厥が強要したため、やむなく可汗の娘を娶った（系図参照）。また、高昌は突厥の風俗に従い、男子は辮髪して胡服を着用した。このように、高昌は通婚や風俗を通じて突厥の強い支配下に置かれていた。

(2) 煬帝による高昌支配と華容公主の降嫁

煬帝は、突厥による婚姻も利用した高昌支配という外交政策を模倣し、突厥と高昌の間に楔を打ち込む目的で、伯雅に対し公主を降嫁させ、高昌の懷柔を試みたと考えられる。

伯雅が大業五年（六〇九）、張掖（甘肅省）で煬帝に拝謁し、恭順の意を示すと、煬帝は伯雅に光祿大夫、車師太守、并国公、高昌王の位を授けた。また、煬帝は大業八年（六一二）正月、伯雅を伴い第一次高句麗に赴いたが、遠征は失敗し、煬帝は同年九月、東都洛陽に帰還した。そして同年十一月、煬帝は華容公主を伯雅に嫁がせ、その後、伯雅に対し高昌への帰国を許した。

華容公主の出自について『隋書』卷八三、高昌伝は「宗女」とのみ記すが、『旧唐書』卷一九八、高昌伝、『新唐書』卷二二一、高昌伝は「戚属宇文氏の女」と記し、『元和郡県図志』卷四十、隴右道下、西州は更に詳しく「宇文氏の女、玉波」と記し、公主の名も伝えている。華容公主は、高昌では襄邑夫人と呼ばれた。

なお、麴伯雅は、高昌の有力者張氏の娘も妻とした。この張氏の娘は張太妃と呼ばれ、伯雅との間に息子の文泰を儲けている。つまり、伯雅は、西突厥、及び地元の有力者（張氏）と各々婚姻関係を結び、それぞれの時代、権勢を持つものとの繋がりが友好関係も利用しつつ王権を強化したと思われる。そして伯雅は、隋との親善強化も高昌の存続には重要と判断し、華容公主の降嫁を受け入れたと考えられる。

(3) 唐代の華容公主

麴伯雅は、唐の武徳二年（六一九）、死去し、息子の文泰が王位を継承した。文泰は、華容公主と再婚した^⑧。文泰と公主の再婚は、突厥支配時代のレヴィレート婚の風習の名残であろう。

麴文泰は新王朝・唐との親善を試み^⑨、武徳七年（六二四）、高祖に拂菻犬を献上し、武徳九年（六二六）、太宗の即位時には黒狐の皮衣を献上し、即位を祝した。太宗も返礼として華容公主に花かんざしを贈り、公主も太宗に玉盤を献上し、互いに謝意と誠意を尽くした。その後、高昌は西域諸国の動静を唐に伝え、唐への忠誠心を表明した。貞観四年（六三〇）冬、麴文泰が来朝した。このとき華容公主が太宗に対し、唐王室の親族になりたいと請願したため、太宗は華容公主に李姓を授け、改めて常楽公主に封じた^⑩。

なお、同じ貞観四年（六三〇）、唐は東突厥を討滅した。このため麴文泰は唐の対外拡張に危機感を抱き、自ら入朝して太宗に臣従の意を示したと考えられる。隋の華容公主は、太宗の養女になる事で恭順の意を示し、高昌の存続に尽力したと思われる。華容公主は、北周の千金公主が、新王朝（隋）の養女となる事で生きのびた例に倣ったのかも知れない。一方の唐も、西域諸国の朝貢路を扼する高昌を掌握したいと考え、文泰夫妻を厚遇したと推測される。しかし、この後、高昌が西突厥と連繫し、焉耆（カラシャール）を攻撃するなど妨害工作を行ったため、貞観十四年（六四〇）、唐は高昌を討滅した。華容公主の動静は史書に見えず、高昌滅亡時には亡くなっていた可能性も考えられる。

おわりに

最後に、本稿で述べた隋代の和蕃公主の歴史的意義について、簡単にまとめ結論とする。

隋は約三百年ぶりに中華の再統一という偉業を果たしたが、その後も東部ユーラシア規模で勢力圏を拡張し、四囲に勢力を及ぼした。その際、北方と西方に対する外交において、隋は有効な手段として和蕃公主も活用した。隋は、和親策としてのみならず離間策としても公主を用い、国内外の情勢も考慮しつつ近隣諸国に対応した。このような隋による東部ユーラシア規模の対外戦略は唐にも引き継がれ、唐も北方（ウイグル・契丹・奚）、西方（吐蕃・吐谷渾・突騎施・フェルガナ・ホータン）に対し、十七名もの和蕃公主を降嫁させ、隋よりも更に時間と規模を拡張し、外交戦略を展開した。唐代における和蕃公主の有用性は、唐の対外拡張や諸国間の牽制において威力を発揮したばかりでなく、安史の乱後、弱体化した唐にとつても、公主を娶った諸国（ウイグル・フェルガナ・ホータン）に援軍を派遣させ、親唐的態度を維持させた点で、より重要な外交手段へと発展していった。⁶⁶⁾

注

- ① 大義公主は北周宗室の娘で、北周時代に突厥に降嫁したので、厳密に言えば北周の和蕃公主であるが、公主は隋の開皇四年（五八四）文帝の養女となり、隋・突厥間の軍事・外交に影響を及ぼしたので、本稿では大義公主を隋代の和蕃公主として扱う。

- ② 義成公主は義城公主とも記されるが、『隋書』卷八四、突厥伝に従い義成公主とする。
- ③ 布目潮瀨「隋の大義公主について―隋唐世界帝国の指標としての「和蕃公主」」、『布目潮瀨中国史論集』上巻、漢代史篇・唐代史篇一、汲古書院、二〇〇三年、初出は『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、一九七九年）、護雅夫「突厥と隋・唐兩王朝」、『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社、一九六七年）、平田陽一郎「周隋革命と突厥情勢―北周・千金公主の降嫁を中心に」、『唐代史研究』第二号、二〇〇九年）、石見清裕「突厥の楊正道擁立と第一帝国の解体」、『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、一九九八年、初出は『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第一〇集、一九八四年）、關尾史郎「義和政変」前史―高昌国王麹伯雅の改革を中心として」、『東洋史研究』第五二卷第二号、一九九三年）、崔明德「中国古代和親通史」(人民出版社、二〇〇七年)、藤野月子「五胡北朝隋唐期における和蕃公主の降嫁―その時代的特質との関連について」、『歴史学研究』第八五五号、二〇〇九年)、藤野月子「王昭君から文成公主へ―中国古代の国際結婚」(九州大学出版会、二〇一二年)。
- ④ 『周書』卷五〇、突厥伝に「他鉢…曰、但使我在南面箇兒孝順、何憂無物邪。」とある。
- ⑤ 護雅夫「突厥第一帝国における *qaghan* 号の研究」、『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社、一九六七年)、鈴木宏館「突厥阿史那思摩系譜考―突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集団」、『東洋学報』第八七卷第一号、二〇〇五年)を参照。
- ⑥ 『周書』卷五〇、突厥伝に「父(兄)伯叔死者、子弟及姪等妻其後母、世叔母及嫂。」とある。
- ⑦ 『旧唐書』卷一九四、突厥伝に「可汗者、猶古之单于、妻号可賀敦、猶古之閼氏也。」とある。
- ⑧ 前掲注③平田陽一郎「二〇〇九」。なお平田氏は、楊堅が国内対策として公主降嫁を口実に北周宗室の五王(千金公主の父趙王を含む)を都に召還して肅清した事を考察している。
- ⑨ 例えば『隋書』卷八四、突厥伝に「千金公主、自傷宗祀絶滅、每懷復隋之志、日夜言之於沙鉢略。由是悉衆為寇、控弦之士四十萬。」とある。『隋書』卷五一、長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七五、太建十三年条も参照。

- ⑩ 『隋書』卷五一、長孫晟伝に「晟先知摂図、玷厥、阿波、突利等叔姪兄弟各統強兵、俱号可汗、分居四面、内懷猜忌、外示和同、難以力征、易可離間、因上書。」とある。摂図は沙鉢略可汗、玷厥は達頭可汗、突利は処羅侯（沙鉢略可汗の弟）のことである。『資治通鑑』卷一七五、太建十三年条も参照。
- ⑪ 阿波可汗が達頭可汗のもとに亡命した開皇三年（五八三）をもつて、突厥が東西に分裂したと解釈されている。松田寿男『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』（早稲田大学出版部、一九七〇年、二五二頁）、護雅夫『古代遊牧帝国』（中央公論社、一九七六年、一〇〇頁）。
- ⑫ 『隋書』卷八四、突厥伝に「沙鉢略以阿波驍悍、忌之、因其先婦、襲擊其部、大破之、殺阿波之母。阿波還無所歸、西奔達頭可汗。達頭…大怒、遣阿波率兵…遂與沙鉢略相攻。又有貪汗可汗、素睦於阿波、沙鉢略奪其衆而靡之、貪汗亡奔達頭。…地勤察…與沙鉢略有隙、復以衆叛歸阿波。連兵不已。」とある。『資治通鑑』卷一七五、至德元年条も参照。
- ⑬ 『隋書』卷八四、突厥伝に「連兵不已、各遣使詣闕、請和求援、上皆不許。會千金公主上書、請為一子之例、高祖遣開府徐平而使於沙鉢略…沙鉢略遣使致書曰…皇帝是婦父、即是翁、此是女婿、即是兒例。…高祖報書曰…既是沙鉢略婦翁、今日看沙鉢略共兒子不異。…千金公主、賜姓楊氏…改封大義公主。」とある。文帝と沙鉢略可汗の舅婚關係については、前掲注③護雅夫「一九六七」一六四～一六五頁を参照。『隋書』卷五一、長孫晟伝、『資治通鑑』卷一七六、至德二年条も参照。
- ⑭ 『隋書』卷一、高祖紀に「（開皇）五年…七月壬午、突厥沙鉢略上表称臣。八月丙戌、沙鉢略可汗遣子庫合真特勤来朝。」とある。
- ⑮ 『隋書』卷八四、突厥伝に「沙鉢略大悅、於是歲時貢獻不絶。…（開皇）七年…沙鉢略…卒。上為廢朝三日、遣太常弔祭焉。…処羅侯竟立、是為葉護可汗…遣使上表言状、上賜之鼓吹幡旗。…都藍可汗…每歲遣使朝貢。」、『隋書』卷五一、長孫晟伝に「（開皇）七年、摂図死、遣（長孫）晟持節拜其弟処羅侯為莫何可汗。」とある。『資治通鑑』卷一七六、禎明元年条、禎明二年条も参照。
- ⑯ 『隋書』卷八四、突厥伝に「平陳之後、上以陳叔宝屏風賜大義公主、主心恒不平、因書屏風為詩、叙陳亡自寄…上聞而惡之、礼賜益薄。

公主復與西面突厥泥利可汗連結、上恐其為變、將圖之。會主與所從胡私通、因笮其事、下詔笮黜之。』、『資治通鑑』卷一七八、開皇十三年条に「楊欽亡入突厥、詐言（劉）昶欲與其妻作亂攻隋、遣欽密告大義公主、笮兵擾邊。都藍可汗信之、乃不修職貢…公主…遣所私胡人安遂迦與楊欽計議、扇惑都藍…因笮公主私事…笮公主。」とある。

⑰ 『隋書』卷八四、突厥伝に「染干号突利可汗…遣使求婚。上令裴矩謂之曰、當殺大義主者、方許婚。突利以為然、復譖之、都藍因笮怒、遂殺公主於帳。」とある。『資治通鑑』卷一七八、開皇十三年条も参照。

⑱ 『隋書』卷五一、長孫晟伝によれば、大義公主の殺害後、都藍可汗が文帝に通婚を請願したが、隋は、都藍に公主を与えたら強力となり叛くであろう事、弱小の染干が懐柔しやすい事、染干を都藍に対抗させ边防を強化すべき事などを理由に、染干との通婚を決めた。

⑲ 『隋書』卷八四、突厥伝に「（開皇）十七年、突利遣使来逆女…妻以宗女安義公主。」とある。突利（可汗）は染干のことである。なお、藤野月子氏は、安義公主の降嫁により、突厥内部の分裂が促進された事などを指摘している。前掲注③藤野月子「二〇〇九」三七頁、前掲注③藤野「二〇一二」八四頁。

⑳ 『隋書』卷八四、突厥伝に「（開皇）十七年、突利遣使来逆女…妻以宗女安義公主。上欲離間北夷、故特厚其礼…雍虞閭怒曰、我、大可汗也、反不如染干。於是朝貢遂絶、数为辺患。」とある。

㉑ 『隋書』卷五一、長孫晟伝に「（開皇）十九年…雍閭大懼、復其達頭同盟、合力掩襲染干、大戰于長城下。染干敗績、殺其兄弟子姪、而部落亡散。染干與晟独以五騎逼夜南走、至旦、行百餘里、收得数百騎…染干馳入朝。」とある。雍閭は、都藍可汗のことである。『隋書』卷八四、突厥伝、『資治通鑑』卷一七八、開皇十九年条も参照。

㉒ 『資治通鑑』卷一七八、開皇十九年条に「（開皇）十九年…冬十月甲午、以突厥突利可汗為意利珍豆啓民可汗…時安義公主已卒…宗女義成公主以妻之。」とある。突利可汗は染干のことである。『隋書』卷八四、突厥伝も参照。

②③ 前掲注②参照。

②④ 染干の啓民可汗への冊立、義成公主の降嫁については、前掲注②参照。都藍可汗の死、達頭可汗（步迦可汗）の自立、及び吐谷渾への亡命、啓民可汗による余衆の掌握等については、例えば、『資治通鑑』卷一七八、開皇十九年条に「（開皇）十九年：師未出塞、十二月乙未、都藍為部下所殺、達頭自立為步迦可汗。」、『資治通鑑』卷一七九、仁寿三年条に「（仁寿）三年：突厥步迦可汗所部大乱、鉄勒僕骨等十餘部、皆叛步迦降於啓民。步迦衆潰、西奔吐谷渾：啓民於是盡有步迦之衆。」、『隋書』卷五一、長孫晟伝に「晟又教染干分遣使者、往北方鉄勒等部招攜取之。（仁寿）三年、有鉄勒：等十餘部、盡背達頭、請来降附。達頭衆大潰、西奔吐谷渾。」、『隋書』卷八四、突厥伝に「步迦奔吐谷渾。啓民遂有其衆、歲遣朝貢。」とある。

②⑤ 『隋書』卷八四、西突厥伝に「吐谷渾者、啓民少子莫賀咄設之母家也。今天子又以義成公主妻於啓民。啓民畏天子之威而與之絶。」とある。

②⑥ 『隋書』卷一、高祖紀に「（開皇）三年：五月壬戌：竇榮定破突厥及吐谷渾於涼州。」とある。

②⑦ 泥擻処羅可汗は処羅可汗とも記されるが、東突厥の処羅可汗と区別するため、本稿では泥擻処羅可汗と表記する。泥擻処羅可汗が木杆可汗の曾孫である事については、大澤孝「新疆イリ河流域のソグド語銘文石人について―突厥初世の王統に関する一資料」（『国立民族学博物館研究報告』別冊二〇、一九九九年）を参照。

②⑧ 『隋書』卷八四、西突厥伝に「射置遣使来求婚：帝：称射置有爱心、吾将立為大可汗、令發兵誅処羅、然後當為婚也。：射置聞而大喜、興兵襲処羅。処羅大敗。：以七年冬、処羅朝於臨朔宮、帝享之。」とある。『資治通鑑』卷一八一、大業七年条も参照。

②⑨ 『資治通鑑』卷一八一、大業五年条に「（大業）五年：突厥啓民可汗卒：立其子咄吉、是為始畢可汗、表請尚公主、詔從其俗。」とある。『隋書』卷八四、突厥伝も参照。

③⑩ 『隋書』卷六七、裴矩伝に「（裴）矩以始畢可汗部衆漸盛、猷策分其勢、將以宗女嫁其弟叱吉設、拜為南面可汗。叱吉不敢受、始

畢聞而漸怨。」とある。『資治通鑑』卷一八二、大業十一年条も参照。

③① 『隋書』卷六七、裴矩伝に「矩又言於帝曰：臣聞史蜀胡悉尤多姦計、幸於始畢、請誘殺之。：矩伏兵馬邑下、誘而斬之。」とある。

『資治通鑑』卷一八二、大業十一年条も参照。

③② 『隋書』卷四、煬帝紀に「大業 十一年：八月乙丑、巡北塞。戊辰、突厥始畢可汗率騎數十萬、謀襲乘輿、義成公主遣使告變。」、『旧唐書』卷六三、蕭瑀伝に「煬帝至鴈門、為突厥所圍、（蕭）瑀進謀曰：北蕃夷俗、可賀敦知兵馬事：況義成以帝女為妻、必恃大國之援：煬帝從之、於是羗使詣可賀敦論旨。俄而突厥解圍去、於後獲其謀人云、義成公主遣使告急於始畢、称北方有警、由是突厥解圍、蓋公主之助也。」とある。『資治通鑑』卷一八二、大業十一年条も参照。

③③ 『隋書』卷四、煬帝紀に「（大業） 十年春正月甲寅、以宗女為信義公主、嫁於突厥曷娑那可汗。」とある。曷娑那可汗は、煬帝が泥獺処羅可汗に賜った可汗号である（注③④参照）。『資治通鑑』卷一八一、大業十年条も参照。

③④ 『資治通鑑』卷一八一、大業八年条に「（大業） 八年春正月、帝：命処羅將五百騎常從車駕巡幸、賜号曷娑那可汗。：車駕渡遼、引曷薩那可汗：觀戰。」、『隋書』卷八四、西突厥伝に「処羅從征高麗」とある。なお、煬帝が泥獺処羅可汗に賜った可汗号、曷娑那可汗は史料ごとに表記が異なり、『隋書』卷八四、西突厥伝では曷薩那可汗、『隋書』卷四、煬帝紀では曷娑那可汗（前掲注③③参照）、『資治通鑑』卷一八一、大業八年正月条では曷娑那可汗、『資治通鑑』卷一八一、大業八年四月条では曷薩那可汗となっている。

③⑤ 『隋書』卷八四、西突厥伝に「処羅從征高麗、賜号為曷薩那可汗：（大業） 十年正月、以信義公主嫁焉：帝將復其故地、以遼東之役、故未遑也。」とある。

③⑥ 前掲注③石見清裕「一九九八」。

③⑦ 『旧唐書』卷一九四、突厥伝に「処羅卒、義成公主以其子奧射設醜弱、廢不立之、遂立処羅之弟咄苾、是為頡利可汗。」とある。

③⑧ 『旧唐書』卷六七、李靖伝に「頡利畏威先走、部衆因而潰散。靖：殺其妻隋義成公主。」とある。『旧唐書』卷一九四、突厥伝、『資

『資治通鑑』卷一九三、貞觀四年条も参照。

③⑨ 『魏書』卷一〇一、吐谷渾伝に「夸呂：又薦其從妹、靜帝納以為嬪。：夸呂又請婚、乃以濟南王匡孫女為広楽公主以妻之。」とある。『資治通鑑』卷一五九、大同十一年条も参照。

④⑩ 周偉洲『吐谷渾史』（寧夏人民出版社、一九八五年）、拙稿「西魏・北周の対外政策と中国再統一へのプロセス」（『史窓』第七〇号、二〇一三年）。

④⑪ 『隋書』卷八三、吐谷渾伝に「其主呂夸：及開皇初、以兵侵弘州。：俄而入寇廓州。」、『資治通鑑』卷一七五、太建十三年条に「八月：吐谷渾寇涼州」、『資治通鑑』卷一七五、至徳元年条に「四月庚午、吐谷渾寇隋臨洮。」とある。前掲注②⑥も参照。

④② 夸呂の名は『隋書』では「呂夸」と記されるが、本稿は『周書』『北史』『資治通鑑』等の表記に従い「夸呂」とする。

④③ 『隋書』卷八三、吐谷渾伝に「平陳之後、呂夸大懼、遁逃保險、不敢為寇。（開皇）十一年、呂夸卒。」とある。『資治通鑑』卷一七七、開皇十一年条も参照。

④④ 世伏の名は、『隋書』では「伏」と記されるが、本稿は『北史』『資治通鑑』等の表記に従い「世伏」とする。

④⑤ 『隋書』卷八三、吐谷渾伝に「（開皇）十一年：子伏立。使其兄子無素奉表稱藩、并献方物、請以女備後庭。」とある。『冊府元龜』卷九七八、外臣部、和親も参照。

④⑥ 『隋書』卷八三、吐谷渾伝に「上：乃謂無素曰、朕知渾主欲令女事朕、若依来請、他国聞之、便當相学。：竟不許。」とある。

④⑦ 『隋書』卷八三、吐谷渾伝に「（開皇）十六年、以光化公主妻伏。」とある。この伏は、世伏のことである。『資治通鑑』卷一七八、開皇十六年条も参照。

④⑧ 『隋書』卷四七、柳謩之伝に「吐谷渾来降、朝廷以宗女光化公主妻之。」とある。

④⑨ 『資治通鑑』卷一七八、開皇十七年条に「（開皇）十七年：吐谷渾大乱、国人殺世伏、立其弟伏允為主。」とある。『隋書』卷八三、

吐谷渾伝も参照。

⑤① 『周書』卷五〇、吐谷渾伝に「父兄亡後、妻後母及嫂等。」とある。

⑤② 『資治通鑑』卷一七八、開皇十七年条に「(開皇)十七年：国人：立其弟伏允為主。：請依俗尚主、上從之。」とある。『隋書』卷八三、吐谷渾伝も参照。

⑤③ 『隋書』卷八三、吐谷渾伝に「伏允懼、南遁於山谷間。其故地皆空、自西平臨羌城以西、且末以東、祁連以南、雪山以北、東西四千里、南北二千里、皆為隋有。置郡縣鎮戍、發天下輕罪徙居之。」、『資治通鑑』卷一八一、大業五年条に「(大業)五年：六月：癸丑、置西海、河源、鄯善、且末等郡：大開屯田、扞禦吐谷渾、以通西域之路。」とある。

⑤④ 『隋書』卷八三、吐谷渾伝に「大業末、天下乱、伏允復其故地。」とある。

⑤⑤ この突厥可汗を大谷勝眞氏は木杆可汗、嶋崎昌氏は木杆可汗時代の西面可汗(室点蜜可汗、ディザブロス、シルジブロス)に比定した。大谷勝眞「高昌麹氏王統考」(『京城帝国大学文学会論纂』第五輯、史学篇、一九三六年、三〇頁)、嶋崎昌「隋唐時代の東トウルキスタン研究―高昌国史研究を中心として」(『東京大学出版会』一九七七年、三三一頁)。本稿の系図では、この突厥可汗を木杆可汗とした。また、伯雅の祖父宝茂、父乾固の名については、麹斌造寺碑に基づく大谷氏の考証(大谷「一九三六」一四～二六頁)に従った。

⑤⑥ 『隋書』卷八三、高昌伝に「伯雅立。其大母本突厥可汗女、其父死、突厥令依其俗、伯雅不從者久之。突厥逼之、不得已而從。」とある。

⑤⑦ 『周書』卷五〇、高昌伝に「服飾、丈夫從胡法。」、『隋書』卷八三、高昌伝に「男子胡服」とある。前掲注③關尾史郎「一九九三」一五六～一五七頁を参照。

⑤⑧ 突厥と高昌の結び付きについては、荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』(名古屋大学出版会、二〇一〇年)、前掲注⑤④嶋崎昌「一九七七」等を参照。

- ⑤⑧ 『隋書』卷四、煬帝紀に「(大業)八年…十一月己卯、以宗女華容公主嫁于高昌王。」とある。『隋書』卷八三、高昌伝、『資治通鑑』卷一八一、大業八年条も参照。なお、關尾史郎氏は、麴伯雅と泥師処羅可汗を比較し、両者の共通点(遣使、入朝、高句麗遠征への従軍、冊封・冊立、公主降嫁)を指摘している。前掲注③關尾史郎「一九九三」一六四～一六五頁。また、藤野月子氏は、麴伯雅が高句麗遠征に従軍した功勞に対し、煬帝が華容公主を降嫁させたと考察している。前掲注③藤野月子「二〇〇九」三七頁、前掲注③藤野月子「二〇一二」八四～八五頁。
- ⑤⑨ 『隋書』卷八三、高昌伝に「伯雅…(大業)八年冬歸蕃。」とある。
- ⑥⑩ 重光三年(六二二)武徳五の年号が記されたトルファン文書(アスターナ五十号墓文書)には「襄邑夫人」という女性が登場し、錢伯泉氏はこれを華容公主に比定している。錢伯泉「敦煌遺書研究」『維摩結経』的題記研究(『敦煌研究』二〇〇七年第一期)。
- ⑥⑪ 張太妃については、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷一、長澤和俊『玄奘三蔵』(講談社、一九九八年)、吳震「麴氏高昌国史索隠」(『文物』一九八一年第一期)を参照。
- ⑥⑫ 『旧唐書』卷一九八、高昌伝に「武徳二年、伯雅死、子文泰嗣。」とある。
- ⑥⑬ 『唐会要』卷九五、高昌伝に「文泰…妻宇文氏、即隋煬帝所賜華容公主也。」とある。
- ⑥⑭ 麴文泰の親唐政策(貢物の献上、西域情勢の唐への報告、来朝など)については、『旧唐書』卷一九八、高昌伝に「(武徳)七年、文泰又獻狗…云本出拂秣国。…太宗嗣位、復貢玄狐裘、因賜其妻宇文氏花鈿一具。宇文氏復貢玉盤。西域諸国所有動靜、輒以奏聞。貞觀四年冬、文泰来朝。」とある。『新唐書』卷二二一、高昌伝も参照。
- ⑥⑮ 『旧唐書』卷一九八、高昌伝に「宇文氏請預宗親、詔賜李氏、封常樂公主。」とある。宇文氏は華容公主のことである(前掲注⑥⑬参照)。『新唐書』卷二二一、高昌伝も参照。
- ⑥⑯ 拙著「7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移―唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に」(溪水社、二〇一三年)、

拙稿「和蕃公主を通じての唐の外交戦略」（『総合女性史研究』第三一号、二〇一四年）。

（京都女子大学非常勤講師）